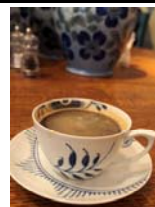


報告 8 ヘルシンガー＋コペンハーゲン

仲間と生きるための支え



定点観測地のひとつ、首都コペンハーゲンから北へ車で 50 分のヘルシンガー自治体。この人口 7 万人の町の障害者、高齢障害者のアパートや 24 時間ケア付き集合住宅、余暇活動センターの複合施設＝SPUC を訪問した。

わたしたちはデンマークの「脱施設化（＝管理された自由のない「施設」での暮らしから、自分の意志で生活を主体的にきずいていける「家」での暮らし＝ノーマライゼーション思想）」の実際を、そこに暮らしている障害者や支える人たちから話を聞き、考えてきた。

そして、国内に 5 カ所あった巨大な入所型施設だったスーロン（Solund）が、「施設解体」ではなく、分散的な 14 の集合住宅のグループ化で運営し、2007 年以降、実践的にも経営的にも発展していることを知った。

他でも、地域に 100 人ほどが住まう住居であれば、支えるスタッフ集団の専門性の継続、付随する余暇活動の場などもつくれるし、支持される。

そして、ヘルシンガー自治体は 2011 年、成人の知的障害者のための住宅と余暇施設の SPUC（Social Padagogisk Udviklings Center）をつくった。

利用者は 200 人。うち 100 人は隣接する住宅に住んでいる。それを支えるスタッフは 75 人（うち 65 人は専門教育を受けている）。一人の欠員には 90 人が応募するような人気の職業だという。



今回は、顔なじみの施設長のルーネは海外出張で、「NO 3」のローネさん、利用者代表でヘンリケさんがわたしたちの質問に答えてくれた。話は、性や恋人とのつきあい、家庭生活、子育てなど生活するうえでのさまざまな不安や悩みに、それを支えるスタッフたちの助言、援助している実態を聞くことになった。



■ヘンリケさん（50歳）の話

○通常の学校ではついていけず、特別クラス（障害児学級）に転校したり、別の学校の学級に移ったりしたが、英語などなにもわからず大変だった。

○「10 年生」を終えた後、大規模な施設入所やグループホームも考えたが、16 歳で家を出て、大きなアパートで一人で暮らしをはじめた。でも、さみしかった。

○その当時のアドバイザーがローネさん。現在は、ここから離れた独立したアパートに住み、町中のカフェ・チャップリンで 3 年前から働いている。それ以前は、競走馬厩舎、ホイヴァンゲン（共同作業所）で働いていた。

○病院に行くときには、アドバイザーがいっしょに来てくれて、医者の説明を自分にわかりやすく話してくれる。金銭管理についてもアドバイスしてくれる。

○SPUC の「利用者協議会」は障害者 7 人で組織されている。「憩いの場所」で禁煙ルールやアルコールを飲むルールも決めた。

○「どうやってタバコをやめられるかのコース」をイブニングスクールにつくすることも話した。

○原付バイクで SPUC に来る人もいるので、その駐車場も協議会が確保した。

○情報誌のココスも発行している

■ローネさんの解説

○「憩いの場所」（余暇活動支援）を提供していて、140 人の利用者がいる。一日平均の利用者は 50 人くらい。近所に住み、夕食をここに食べに来る人もいる。

○（イブニングスクール：余暇活動）には、自分でお金を払って、いろんな「コース」に参加している。自分でお金を払うからかよく通っている。



○ハイキング、小旅行なども企画しているが、女性はショッピングが主。
○セクシャルアドバイザーが2人いて「セックス・メッセ（知る会）」を実施している。
○性的行動に不安を感じている人もいるので、いろんな助言、指導をしている。

「ふれあいを求めて、セックスしたい！というとき
どういう支援をするか？ だれかとセックスしたい
ときは？」の質問があった。これはスウェーデンの
青年相談センターでも聞いたことだ。

○避妊についてよく話す。感染症の予防についても
わかりやすく話す。

○「恋人が欲しい、セックスしたい」には、「どう
したら恋人はできるか？」。など、つきあい方含め、
よく話し合う。

○恋人がいる場合は、強引な SEX ではなく、どの
ようにムードをつくり、よりスムーズな SEX につ
いて話す。必要があれば、コンドームを買ったり、
クリームをいっしょに買ったりもする。

○2人のセクシャルアドバイザーはステップを踏み
ながらいねいに指導する。結果、両者がハッピー
になり、まわりにもよい環境をつくっている。

○恋人はいない、でも強く SEX を願う人には、オ
ナニーの仕方を教える。

○「だれかと SEX したい！」の要望が強い場合、
信用ができる「売春婦」の紹介者につなげることも
ある。

○だれとでも寝てしまう女性には、どうやって一定
の信頼できる関係をつくるかなどでいねいに指導す
る。

「家庭を持ち子どもが欲しい」という場合には

○SPUCの利用者で結婚した人たちは何人もいる。
○そして子どもができた場合、子育ての支援を提供
するか、どうしても十分なケアができないと判断し
た場合は里子に出す。そのケースも多い。

○子どもが保育園に入った場合、保護者に対する支
援はSPUCが責任で。一方で、子どもに対する支援
は保育園が責任をもつ関係だ。

○「子どもが欲しい」という夫妻も何人もいたけれ

ど、「育てることができない」と判断しなければなら
ない場合はある。理解してもらうためにも話し合
いは時間をかけて行い、決定は本人。

「里子に出すような判断はだれがしているか？」

○妊娠して乳児～7歳は、家庭訪問があり保健師が
面談している。

○保育園で24時間の家でのケアは困難とすると、
保育士とケースワーカーが支える。

○しかしやっぱり無理だのときは、市の関係当局＝
ケースワーカー、保健師、保育士の場合もある、そ
れに加え、児童福祉委員会、議員、裁判官座長の集
団合議によって強制措置を決める。それは法的拘束
力を伴う。

○子どものためになにが一番最善かがポイントとな
る

この海峡の町で、仲間といっしょに暮らしたい！
はたらきたい！余暇を楽しみたい！ わたしたちにも
できる！そして家族になりたい！

その意欲、気持ち、ねがいにいそいながら、
徹底して支えようとするスタッフの集団がいる。
それをなす自治体の障害者施策と財政がある。



夕方、コペンハーゲン市内にもどり、電車に乗っ
て余暇活動センター Lavuk を訪問した。ここは2004
年以來の再訪。どんなふうにななっているだろう。

イクメン所長のイエスパーが説明してくれる。ラ
ブックは市内に青年クラブ(ここ)、成人クラブ(2014
年訪問)、STU(学びの場)、デイケアセンターの4
つの施設を運営している。「平等」「信頼」「尊敬」「対
話」を重視し、安全、安心できる環境だ。

12歳～25歳の青年170人が利用し(一日平均70
人)スタッフは26人。

室内では音楽、絵画、テキスタイル、ゲーム、遠
出してボーリング、水泳、乗馬、スキーなど、さら
に国内や海外旅行も楽しんでいるようだ。

10年前に比べると障害の重度化はあるけれど、IT
ゲームへのズブズブも感じるけど、それでも、みん
なで楽しそうだ。(蘭部英夫)

